



いつもネイと会える訳ではない！

今日も今日とて、ヒヨコを運ぶ。

クロマオーの毎日の暮らしは、正直な所、先が見えない。

「いつ終わるんだろうなあ。」

大きな鼻をフンと鳴らし、バリトスは囁いた。バリトスは後ろ向きに生えた角と、大きなギョロ目で、怪物そのものの見た目だ。ヒトから見れば恐ろしげに見えるそれも、マゾクのクロマオーにとってはちょっとブチャイクくらいだ。

ブチャイクでも彼には十年前、恋人がいた。彼とよく似た恋人だった。

引き離され、十年ここで勤めている。

クロマオー「バリトスさん、また昔のこと考えているの？」

バリトス「うん。めっちゃ考えてる。つらい。」

クロマオー「ビスケット、あげる。」

休憩は与えられる。ビスケット二枚と、コーラがもらえる。毎日同じだ。

二人で外のベンチに座りながら、（ちなみにこのベンチはいつも奪い合いになる。今日は曇り空なので、比較的たやすく座れた。）十五分間ぼんやりする。

バリトス「つらい。お前も王子だったんなら、こういう時にかける言葉くらい用意しとけ。大体お前の親父がだな……。」

クロマオー「……ごめんなさい。」

バリトス「まったく、お前はずるいよ。」

クロマオーは決して嫌われてはいなかった。こうなった当初は小さかったし、大きくなってからもよく話を聞く方だったから。

ただすこしずるい。謝ればいいと思ってるだろうと怒る人もいた。バリトスはというと、ため息一つで許してくれた。

バリトス「お前、あのお嬢さんに気に入られているようだな。」

クロマオー「気に入られているっていうか、仲良くしてもらってるっていうか、あの、“…き”っていうか」

バリトス「最初はお前がお嬢さん騙して、マゾクの再興を狙っているのかと思ったけど、お前の様子を見ていると逆だな。」

クロマオー「逆？」

バリトス「お嬢さんが、マゾクの動向を知る為のスパイなんだ。」

クロマオー「！！！」

バリトス「でなければ、ヒトがマゾクなんて相手にする訳ない。俺たちはドレイだものなー。」

そんなこと、考えてもみなかった。クロマオーはネイに会いたくなって、立ちあがった。だが、ネイに自由に会える訳ではない。ネイが訪ねてこないと会えない。

逡巡していると、バリトスがそっと声をかけた。

バリトス「まあ、推測だ。そうである証拠はない。」

言いたくなかったから言っただけ、とバリトスはため息交じり。

バリトス「つらい。」

クロマオー「僕までつらくなったよ。」

バリトス「ざまあみろ。」

二人でコーラを飲む。

毎日同じ暮らしが続いていく。

きっと今後もずっと同じなのだろうと思う。そうして歳をとっていくんだと思う。いずれネイはヒトと結婚し、子供を見せてくれるかもしれない。クロマオーはきっと、王族の血を絶やす為に一生一人だろう。マゾクの仲間は年上の者ばかりだ。いずれクロマオーは一人になる。クロマオーはそういう星の元に生まれたんだと思っていた。

胸がずきりと痛む。

でも

僕が動きだしたらどうなのだろうか。

僕に勇気があったら。

一枚残ったビスケットに、ぽつんとしみが出来る。

雨粒が、空からまっすぐに落ちてきた。クロマオーは入ろうと、バリトスに視線を送る。

バリトスは寂しそうに見上げていた。

彼の十年分の涙が、落ちてくるようだった。

そう、もう十年経つのだ。

今更僕に何が出来るというのだろうか。

クロマオーはバリトスを無理に引っ張り、中に入った。
その日はネイは来なかったのだ。

いつもクロマオーのことばかり考えている訳ではない！

その頃のネイは、といえば

必死に粘土で、人形をつくっていた。ネイはその年齢にしては、自分の頭の中のことを形にするのがとても上手だ。

つくった人形は、これまた自作の家に住ませる。家はまだ厚紙でつくった、素人丸出しの出来なので、いつかより良いものをつくりたいと思っている。

出来あがったヒトの少年少女を置いて、悦に入る。

ネイは自分の見た目にコンプレックスがある。そういうこともあって、お人形は好きだ。

お人形は完璧だ。この小さな家の中で、お似合いの二人は仲睦まじく暮らすのだろう。

それはパーフェクト！

人形はものをいわないので、喧嘩をすることもなければ別れることもない。永遠に続くおとぎ話のように、確実だ。

そう、完璧で、確実な世界だった。

ネイは自分の顔の、目が好きではない。

もっとくっきりした二重が良かったのに、あの母親はどうしてこう産んだのだろうか？

問題は父にもあったのかもしれないが、父が誰なのかは分からない。

もしかしたら工場長かもしれない、とは十歳を越えた頃から思っている。

粘土が余ってしまった。何となく指で捏ねていたら、クロマオーの頭の形が出来あがった。

ちょっと猫みたい。でもこうして、目を縦に書けばクロマオー。

そっとドールハウスに入れてあげる。

今ネイが暮らすこの家にクロマオーが入ることは許されないが、

ドールハウスの中は完璧な、世界だから。

そしていつか確実に来る世界だから。

ネイはクロマオーの頭部を指で、弾いた。

彼はどう考えているのだろうか。

いくつもある未来を、どう選び取るのだろうか。

ぼんやりと大きなことについて考えていると、

そこにノックをする者がいた。

扉を開けると、そこにはエレクトラ先生が立っていた。



ネイ「先生。忘れ物？」

エレ「そうなの。うちに帰ってから気がついたわ。まんねんくん忘れてったでしょう？」

ネイ「まんねんくん、後で渡そうと思ってこっち挿しといた。」

まんねんくんとは万年筆のことだ。ネイはスタンドに挿してあるまんねんくんをエレクトラに差し出す。どうもエレの良い人からもらったらしいが、エレは未だ独身だ。

エレ「じゃあ予習と復習をしっかりとっておいてね。今日の、お尻が五つに割れたお姫様の話は次の試験に出すから。それと明後日の合同授業の練習もちゃんとね。」

ネイ「明後日、合同授業なの？」

エレ「聞いてないの？工場長さんも、ダメねえ！」

マゾクの子供たちは、高貴なものも含め、学校という場を設けて子供たちを集めて授業をしていたが、ヒトは大抵が家で教師を雇い勉強をさせている。しかしたまに、合同授業の日がある。その日はかっちりした服を着て集まり、ダンスの練習をする。いわゆる社交場のようなものだ。

ネイ「行きたくないんだけど。」

エレ「だめよ。そう言ってこの前もサボったでしょう？行けばシロバンチョーくんもいるよ。」

ネイ「だから、先生！シロバンチョーとは何でも無いんだから！」

前に行った時、シロバンチョーと話していたのをからかっているのだ。話くらいすると思うが、シロバンチョーは同年代の女子とあまり話さないの（実際の話、おしゃれと恋愛にしか興味が無さそうな子ばかりだ）、目立って見えたらしい。しかもシロバンチョーは注目されるタイプな

ので、からかいにはもってこいと言えた。

エレ「何でもないじゃだめよ。相手は勇者の息子よ。いいお話じゃないの。」

ネイは頭を抱えたい気持ちで、このおばさんをやりこめる為に心にもないことを言った。

ネイ「希代のバカ息子って有名だよ！」

エレも悪いヒトではないので、そう、と笑った。

シロバンチョーは勇者の息子である。

勇者とは十年前の決闘の相手だ。

エレクトラはふと目線をさまよわせ、にやにやとした。まだシロバンチョーが今のシロバンチョーのように、カッチカチの人間じゃなかった頃のことを思い出したと言う。

エレ「バカかも。あの子、昔ダンスの女子パートまで覚えて、踊ってたよね。完璧主義な所があったから。子供だったから曖昧で、純粹で、おばかで可愛かった。」

ネイ「……………」

エレ「近頃は何か、大人になっちゃった。ネイちゃんもだけど。」

寂しそうなので、ネイはエレの髪を撫でてあげた。

エレ「私より先にけっこんしないでね！」

ネイ「それは分からない。」

女同士はレースのドレスに向けてのレースである。

その日、
厳密に言えばその日もまた、
シロバンチョーは、南に向かっていた。
馬車の後方にはデフォルトコマネチが一人、乗って付いてきていた。

デフォ「シロバンチョーさま、今日の子は助けられると良いですね。」
シロ「男で、お前みたいにのんびりしてたら助けられるけどな。」

ゴミ捨て場に捨てられるマゾクは、
自分で死んでしまうものが多くいた。
マゾクにもプライドがあり、助けようとしたら攻撃してくるものもいる。
デフォのようにうまくいくのは稀だった。
最初から全てを助けられる訳ではないと思っていたが、
自ら生きようとするものだけは逃さず守ろうとした。
そして女は助けなかった。
増えてしまうことがまだ怖かったからだ。

デフォ「シロバンチョーさま、見えてきました。」
シロ「今日は誰もいないと良いな。」

南のゴミ捨て場。
そこに立っていたのは、



ジュンジュンだった。

ジュンジュン「また俺のしんぱちに会いに来たな！シロバンチョー！！！」

シロバンチョー「……………」

確かにここにはしんぱちおじいもいる。

ジュンジュン「お前がいくら誘惑しても、しんぱちの入れ歯は俺のものだ！」

シロバンチョー「入れ歯は間違いなくしんぱちじいのものだ。」

ジュンジュン「何、その『俺だけが理解者』みたいな言い方？」

シロバンチョーは相手にしないことにして、脇を通り過ぎた。

ジュンジュンはムカつく歩き方をし（身をかがめてすごんでくる→シロバンチョーは背が低い）付いてきた。後ろから、デフォも駆けてくる。

ジュンジュン「ヤダね、偽善ってヤツだ。マゾクを連れて可愛がっているふりか？」

シロバンチョー「……………」

ジュンジュン「可愛がればそれなりに相手してくれるものな。ヒトとうまくやれないのを、マゾクとすることで晴らそうとする。終わってるな、勇者の息子！」

シロバンチョーは、ジュンジュンが言い終わる前に殴りつけた。

当たってなくもないので腹が立つ。時々自分を責めて眠れないこともある。

ジュンジュンはうずくまって暫くおとなしいようだ。その間にしんぱちおじいのボロ家をくぐった。

応対してくれたのはマゾクの少女。

マゾクの女はしんぱちが助けてくれている。シロバンチョーが用意した小屋で男女一緒なのはけしからんと、しんぱち自身が申し出てくれたことだ。

デフォなどは顔を赤くしている。



しんぱちとよめが、奥から手を拭きながら出てきた。

しんぱち「おお、シロ。来たか。おいお茶！」

よめ「ただいま～～。」

シロバンチョーとデフォルトコマネチは、奥の倉庫に連れてかれた。この家には寝床と倉庫しかないのだ。

ステージになりそうな大きなタイヤが置かれている。あれだけのタイヤを使う車は、きっとマルエルファルの大巨人が乗るのだろう。そういうおとぎ話があるのだ。

しんぱち「表に変な男がいただろ？」

シロ「いた。」

しんぱち「何だか弟子になりたいとかでな。俺ァは師匠になる気はないって断ったんだが、毎日いるんだ。」

シロは無言でしんぱちの貞操を心配しながら、お茶を一口飲んだ。気を揉むことはない。しんぱちは今までずっとこんな所で、身を守って生きてきたのだから。多分。

シロ「扉を開けてくれたのは何てお嬢さんだい？」

よめ「リルコっていう子よ。昨日の晩捨てられていて、物分かりがいい子だわ。きちんとすることをきいてくれるもの。」

デフォ「リルコさん……。」

リルコはタイヤの上で、所在なさげに足をぶらぶらさせていたが、自分に話が及んだことに気づ

いたらしく会釈をした。

女のマゾクは身の振り方が色々あるので（大抵が北側で雇われていた者達なので、南側の街でなら食べる分くらいは働かせてもらえる。男だと事件が起きる危険性が高いので嫌われるのだ。）ここには数週間しかいないことが多い。

ということはデフォの恋も数週間で終わってしまう可能性があるようだ……？

デフォ「何ニヤニヤしているんですか、シロバンチョーさま！」

シロ「いいや。」

よめ「でも困ったわ。いつまでもこうしてはいられないし。」

しんぱち「食いっぱぐれがない所にはもう何人も送っちゃったしな。」

よめ「リルコだけなら置いておけるくらいの余裕はあるけど、これからも捨てられる子がいたら助けきれない。どうしたらいいかしら。」

しんぱち「始めたは良いものの、どうするんだ？シロよ。」

実際の話、シロバンチョーが用意したマゾク用の小屋ももういっぱいだ。

しんぱち「助きたい気持ちだけでは、何も変わらないんだぞ。お前が考えろ。」

この活動を始めたのは、シロバンチョーだ。だからこそ、しんぱちは全責任をシロに預けているのだ。

一生このまま何も変わらないということなんてないと知っていたのに、重くのしかかる責任にシロは口を覆ってふさぎ込んだ。

もし自分が動きだしたらどうなるのだろうか。

もし自分にすこしの勇気があったなら。

お茶をすする。

しんぱちはデフォと話を始めていた。

デフォ達マゾクは、シロバンチョーに敬称をつける。十年前、あの決闘で負けたから、らしい。しかし十年も虐げられていい筈はないと思う。

勝った負けたで、関係が変わっても良い。でも十年も悔やむほど、幸せを阻害するほど決定的であってはならないと思う。

たかだか父が、一度勝ったくらいのことだ。

しんぱち「そういえばシロ、親父さんは元気か？」

シロ「もう二週間は会ってない。」

よめ「あなたに家を預けて大丈夫と安心してるとでしょうね。」

シロ「会いたくないのさ、俺には。」

よめ「そんなことはないわ。シロ君は奥さんが残した大事な一人息子だもの……。」
デフォ「そうですよ。」

小さい頃から、
父は忙しく、家に滅多に帰ることはなかった。
母は最初からいなかった。
自分を産んだせいで母が死んだと知ったのは、父が決闘に勝ったすぐ後だった。
父は一層忙しくなり、シロはばあやと二人だけで暮らしていた。
こうして今マゾクを守ろうとしているのは、
父に対する復讐かもしれなかった。

シロ「帰ろうか、デフォ。」

ばあやが亡くなり、広い家と土地は自分の好き放題になった。
先生は時々来るが、マゾクの小屋には絶対入れなかった。
どうして父に反抗するようなことをしているのに、
父の命で色々な所に顔を出したりするのか、自分でも分からない。
鏡を見ると父に似た面立ちに、驚くことも多々ある。
父という人が、自分にとって何なのか答えが出ないでいる。

分かるのは、デフォ達が
死ぬべきではないということだけだった。

父と自分は違うのだ。

青くなれ！

よめ「シロ君、これ持って来なさい。」

奥から持ってきたタッパーにはお漬物がごっそりと詰まっていた。よめさんは、それをクチャクチャのビニール袋に入れながらシロに笑いかけた。何か言いたげだが、よめさんはいつも多くは語らなかった。



シロ「いつもすみません。ありがとう。」

よめ「いいの。私達には子供が無いからね、食べさせたいの。」

しんぱち「おい、シロはもう子供じゃねえだろ。」

よめ「そうでした。もういっちょまえのお兄さんでした。」

デフォが持ちたそうに足の回りをうろつくので、ビニールを預ける。

デフォはお手伝いがとにかく好きだ。

せっせとよく働く。今までひよこしか運んだことがないそうだ。

本当は色んな事がしたいんだろうに。

リルコがやってきて、1センチくらい手を振る。デフォは大きく180度手を振っていた。

振られそうな感じだが、デフォは一生懸命である。

外に出ると、ジュンジュンが仰向けに倒れていた。

無視してその場を立ち去ろうとすると、彼の呟きが聞こえた。

ジュンジュン「いやらしい入れ歯だぜ……。」

聞かなかったことにして、足早に通り過ぎた。ジュンジュンは妄想を続けている。
デフォが誤って踏みつけると、「ハードだぜ……！」と悲鳴をあげたが、すぐまた妄想のお仕事に戻った。

なのでシロもうちに帰るお仕事を遂行した。

カタンカタン、車輪は回る。
誰もいないうちだったけど、
今はデフォ達がいた。

他でもない自分が、
やらなければいけないこと。

戦う勇気は誰がくれる？
それはきっと仲間に違いない。

夜のクロマオーと（5）に続く。